

一、物語、その「性(さが)」を問う ―「散逸」と「改作」を軸にして―

天理大学 原豊二氏

近世の印刷事業より前、物語文学は書写活動によって受容されてきた。問題はそのことによって、物語文学にどのような特徴的な性質が生じたかである。本発表では、古代・中世の物語文学を鳥瞰し、物語の「散逸」と「改作」を一種の新陳代謝として捉え、相互に連動的な関わりがあったことを、具体的な作品を通して考えてみたい。書写世界において、物語が散逸し、そして改作されることは、内包的・内発的な性(さが)であったことを述べる。

二、源師房の才学・文事

神戸女子大学 北山円正氏

具平親王の嫡男である源師房(一〇〇八〜七七)は、後期撰関時代の廟堂において重きをなした人物である。また当代一流の文人でもあった。近年はその和歌活動が注目され、歌合歌会を催し歌人たちの後援者としての側面などが明らかになっている。いっぽう、漢学の才を活かした事績にもみるべきものがあり、大江匡房が「文道之主」と評するほどである。当時の資料を取り上げて、漢学の学殖や文事の中身をうかがってみたい。